

アクセスガイド



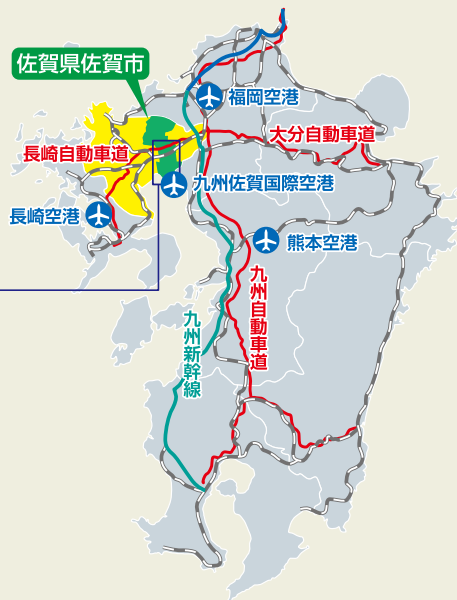
情報

- ラムサール条約と条約湿地(環境省)
<http://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/>
- 干潟の生き物図鑑
http://www.pref.saga.lg.jp/sy-contents/higata_ikimono/
- 佐賀市役所
<http://www.city.saga.lg.jp/>
- 一般社団法人 佐賀市観光協会
<http://www.sagabai.com>

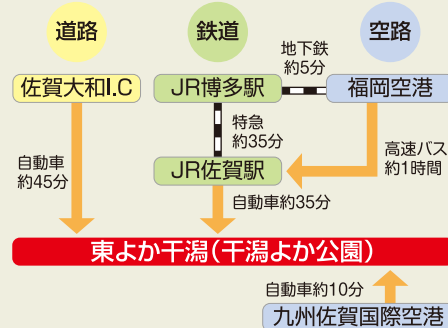
ラムサール条約湿地 東よか干潟ガイドブック

発行:環境省九州地方環境事務所 ©環境省2016
 熊本県熊本市西区春日2-10-1 熊本地方合同庁舎B棟4階(〒860-0047)
 九州地方環境事務所 ☎096-322-2413
 Website: <http://kyushu.env.go.jp/>

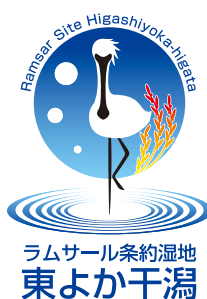
制作協力: 佐賀市
 写真協力: 栗山千速、音成三男、佐賀県有明水産振興センター、
 佐賀県有明海漁業協同組合、佐賀市、一般社団法人佐賀市観光協会
 デザイン: 株式会社フリーダム



交通



※東よか干潟へは、「干潟よか公園」
 (佐賀市東与賀町大字下古賀2885-2)
 を目指してお越しください。



ラムサール条約湿地 佐賀県佐賀市

東よか干潟

東よか干潟ガイドブック



—— 守り、つなごう、未来へ ——

さっきまでここは海やったばってん
 どんどんて潮の引いて もうがばい広か干潟になったばい
 濁ん泥ん上にゃあ ムツゴロウのびよんぴよん跳ねまわいよっし
 シオマネキの手ば振りよっとのやーらしか
 空ば見っぎ 渡り鳥のくーっ飛びよっ
 秋になっぎんた シチメンソウの真っ赤んなって そりゃあきれいかばい
 ラムサール条約湿地「東よか干潟」
 まえうみもんでん 鳥でん 人でん こん干潟から
 恵みばどっさいもろうて生きてきたと
 ほんなごて 宝の海ばい



発行：環境省九州地方環境事務所

東よか干潟の概要

東よか干潟の特徴

東よか干潟は、佐賀市の南部に面した有明海の東与賀海岸及びその沖合に位置し、有明海北部に流入する六角川、嘉瀬川、本庄江等の河口と海岸に発達する単一干潟で、国内でも有数の規模を誇る有明海の干潟の一部です。

潮の干満差が約6mとされる有明海は、福岡県、佐賀県、長崎県及び熊本県の4県にまたがっており、干潮時には広大な干潟が姿を現します。その中でも、東よか干潟周辺では、海岸からの幅が約2.5km、面積約1,300haの干潟面が形成され、そこには貴重な湿原植生、ゴカイや貝などの底生生物、ムツゴロウやワラスボなどの魚類など、有明海特有の珍しい魚介類が豊富に生息しています。



ラムサール条約湿地 東よか干潟



満潮時



干潮時

また、絶滅危惧種を含む、シギ・チドリ類を中心とした、多くの渡り鳥の中継地及び越冬地として重要な場所であることから、東よか干潟は国指定鳥獣保護区特別保護地区に指定されています。

東よか干潟の日本一

【シギ・チドリ類の飛来数】

環境省のモニタリングサイト1000において、渡り鳥であるシギ・チドリ類の飛来数が最も多いのが東よか干潟（大授瀬）です。その他の野鳥も多く飛来し、四季を通じて約100種類以上の野鳥が観られます。

サイト名	最大数
東よか干潟（大授瀬）	12,127
荒尾海岸	4,831
風蓮湖北部	3,474
氷川	3,494
三番瀬	3,071
不知火干潟	2,549
谷津干潟	2,218
球磨川河口	2,202
葛西海浜公園	2,110
藤前干潟	2,108

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査
平成27年度春期調査報告より、飛来数の上位10箇所。



海岸から沖を望む。干潮時にはたくさんの野鳥が餌をついばむ。奥に見えるのは海苔(のり)ひび。

【シチメンソウの群生地】

シチメンソウは塩分に耐える塩生植物で、アカザ科の1年生草木。国内では有明海沿岸の干潟だけに生育する絶滅危惧種です。東よか干潟を望む海岸線は、このシチメンソウの国内最大の群生地となっており、秋になると海岸線が、赤い絨毯を広げたように鮮やかな紅葉色に染まります。「海の紅葉」と呼ばれる有明海の風物詩です。



海岸線を真っ赤に染めるシチメンソウ(秋)

【有明海の干満差】

東よか干潟のある有明海は、約6メートルという日本一の潮汐の干満差を誇り、干潮時には沖に向かって5～7kmの広大な干潟を形成します。その面積は、日本の干潟全体の約4割を占めています。

ラムサール条約と賢明な利用(ワイズユース)

ラムサール条約とは

ラムサール条約(正式名称:特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約)は、湿地の保全とワイズユース(賢明な利用)を促進することを目的とする国際条約です。1971年、イランの都市、ラムサールで条約が採択されたことから、「ラムサール条約」と呼ばれています。

また、ラムサール条約を締結している国のことを締約国といい、およそ3年ごとに開かれる締約国会議で、各国の湿地の現状、保全の取り組み、今後の計画などについて話し合います。1993年には北海道の釧路市で第5回締約国会議が開かれました。

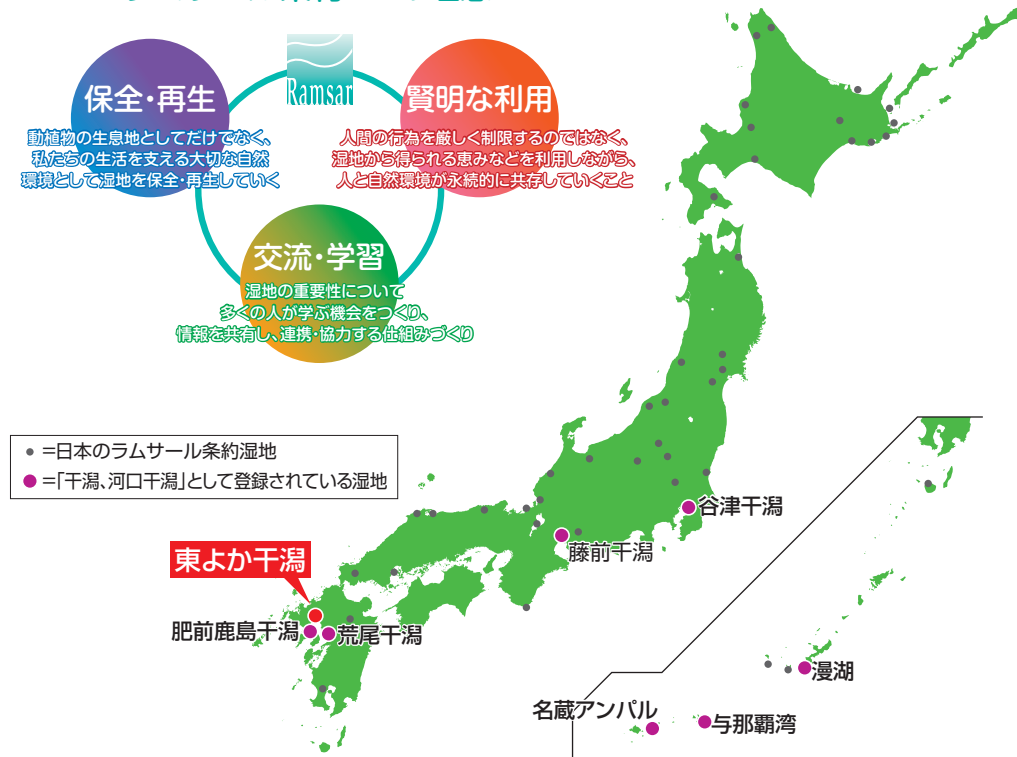
日本のラムサール条約湿地

2016年3月現在、ラムサール条約の締約国は169カ国で、日本は1980年に加入し、50カ所の湿地が登録されています。

その湿地の姿も多種多様で、湖や沼、湿原だけでなく、河川や干潟、マングローブ林、珊瑚礁、また、人工的な水田なども含まれています。その中で、東よか干潟と同じ「干潟」として登録されているのは8箇所になります。

平坦部の少ない日本では、干潟は様々な開発事業の対象とされやすく、1945年から1994年までのおよそ50年の間に国内の約4割の干潟が失われ、今日、干潟は貴重な存在となっています。

ラムサール条約3つの理念



干潟と生き物の関係

陸上に降った雨水は野山をくぐり、たくさんの栄養塩(水に溶けたチッソ・リン・ケイなどの栄養物質)や有機物をかかえ、河川を通り、やがて海に流れ込みます。

干潟において、水中の栄養塩は干潟表面のケイソウ類や植物プランクトンによって取り込まれます。これらを動物プランクトンが取り込み、さらにそれらが魚類や貝類によって食べられ、また人間や鳥などの食料となって、再び地上に戻ります。

また、泥や砂粒に付着した有機物は、ゴカイやカニ類などの底生動物に取り込まれ、それらもまた鳥類の食料となります。

こうしたすべての生物の個性や生物同士のつながりを「生物多様性」と言い、有明海でも、こうしたサイクルが繰り返されてきました。

東よか干潟のワイズユース

ラムサール条約は、湿地を守るため、

人々が湿地に入ったり利用できないようにすることを求めています。むしろ人々が関わり、湿地がもたらす恩恵を十分に理解することで、恒久的に活用していくことを求めています。それが、「賢明な利用(ワイズユース)」なのです。

東よか干潟もまた、古くから様々な利活用がなされてきました。

先人達は、干潟に適応した漁法や専用の漁具などをあみ出し、ムツゴロウをはじめとする干潟の魚介類は、土地の人々の生活の糧となってきました。

また、干潟の周辺では、飛来する野鳥や干潟の生き物たちの観察にたくさんの人が訪れています。近年では干潟よか公園を中心に、様々なイベントが開催されるなど、観光やレジャー的側面からも利用されています。

干潟を賢く利用することで、たくさんの人に東よか干潟の価値や魅力を知ってもらい、次世代に確実に引き継いでいくことが大切です。



干潟と干拓の歴史

佐賀平野と有明海のなりたち

現在、東よか干潟と呼ばれる場所が、今の姿になったのは、実は昭和に入ってからのことです。東よか干潟を望む佐賀平野は、かつて海だった場所が、長い年月の中で、河川からの土砂の流入により、徐々に陸地の部分が増えると共に、江戸時代以降の本格的な干拓事業により、広大な平野が形成されました。特に戦後の人工爆発に伴う食料増産のため、多くの耕作地が造られてきました。現在、その干拓面積は260平方kmにも及びます。

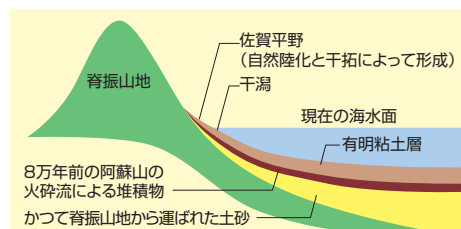
有明海をつくる、有明粘土層

今から約8万年前、九州中央に位置する阿蘇山が大噴火し、吹き出された土砂は九州全土に降り注ぎました。その土砂は長い年月をかけて風化し、植物質を含んだ、

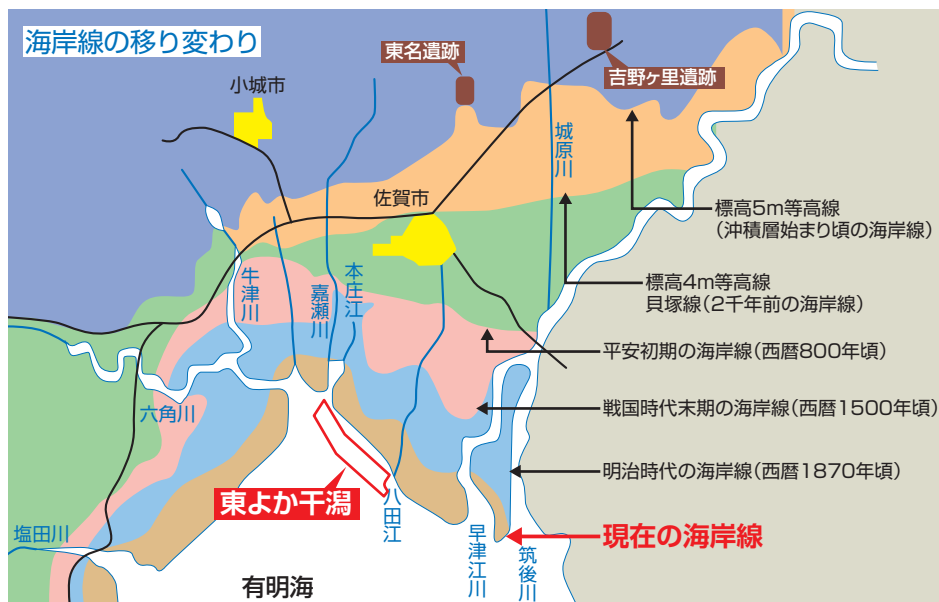
粘土質の泥となりました。

有明海に注ぐ大小の河川によって運搬されたこの微細な泥は、遠浅で日本一の潮汐干満の差を持つ沿岸域の海中で遊泥となり、満潮時に潮流によって海岸側に戻され、徐々に堆積して干潮時に露出する干潟面を形成してきました。

この有明海を形成する粘土質の泥こそが、「有明粘土層」と呼ばれ、有明海のにごった海水の元であり、また干潟をはじめ、多くの生物を育む命のゆりかごとなっています。



現在の佐賀平野の模式図(佐賀県立博物館展示パネルより)



有明干拓起工当時の測量風景(九州農政局刊「有明干拓史」所載)



現場査察の様子(九州農政局刊「有明干拓史」所載)



昭和36年3月の有明海岸東と賀工区

地名に残る干拓の名残り

有明海沿岸には、搦(からみ)という字が付いた地名がたくさんあります。東よか干潟がある地域も大授搦(だいじゅからみ)と呼ばれています。

搦とは、「縄が木にカラみつく」という意味です。これは昔の干拓工事の名残りで、堤防にする場所に丸太杭を打ち込み、その杭に木の枝や竹などを絡み付け、満潮の時に潮といっしょに運ばれてくる土砂を、その場所に堆積させました。その自然の力によって、杭周辺の地盤が満潮位近くまで高くなったところを付き固めて、

それから上へは人力で堤防を高くしました。このようなことから、多くの干拓地を“〇〇からみ”と命名するようになりました。

他にも、籠(こもり)が付く地名もあります。籠とは竹カゴのことで、竹であんだ円筒型のカゴに土を入れ、堤防になるように並べて置く工法で、搦より古い干拓地に多い地名です。干満の差が大きい有明海だからこそ可能な工法でもあり、先人の知恵には感心させられます

このように干拓の歴史を物語る地名が、有明海周辺の各地に多く残っています。

有明海と共に生きる

有明海の伝統漁法

干満差約6メートル、水深は満潮時でも最深部が20メートルしかなく、唯一開けた湾口も非常に狭い有明海。そんな特異な環境により、そこに生息する生き物たちもまた、ムツゴロウやワラスボなど、他ではほとんど見られない珍しい魚介類が数多く生息しています。

この有明海の広大な干潟は、沖合に対して前の海、「まいうみ」、そこに生息する魚介類は「まいうみもん」と呼ばれています。

近隣に住む人々は干拓地での農業のかたわら、この豊かな漁場で、「まいうみもん」たちを漁獲の対象とし、生活の糧として、ともに生きてきました。

干拓地である近郊農地は、その地質が潮が引いた潟とそっくりであることから、その漁獲道具においても、農具から転用したもの、また漁具と農具がほとんど同じ形状のものがあるのが特徴的です。

しかし現在では、食文化の変化、あるいは漁獲対象の生息数の激減などから、このような、昔ながらの風景を見ることは少なくなりました。



ワラスボ

かき棒の先は
カギ状の爪が
付いています

スボかき

ワラスボは泥の中の生活に適応し、その目は退化して、ほとんど確認できません。その見た目からは意外な程、濃厚な味わいで、干物や煮つけにして食べられます。普段は潟の泥中に生息しているため、先にカギ状の金具が付いたかき棒を使って、干潟の泥を引っ掻くようにして引き上げます。



ワラスボ干しの風景



干しワラスボ

ガタスキー

東よか干潟の泥は粒子が細かく、柔らかい粘土状の干潟であるため、立つと足が沈んでしまいます。そのため、ガタスキーと呼ばれる押し板が必要不可欠になります。



ムツゴロウの蒲焼き(昭和42年)

ムツかけ漁

ムツゴロウは、日本では有明海と八代海にのみが生息するハゼ科の魚で、干潮時には干潟の上をぴょんぴょんと跳ね回る愛らしい姿がみられます。ムツかけ漁は、釣竿の先に付いたカギ状の金具を投げ込み、ひっかけて採る手法。その鮮やかな技はまさに職人芸と言えます。



ムツゴロウ



竿の先の
カギ状金具

タカッポ漁

一度通ると戻れない、特殊な構造の筒を、ムツゴロウの巣穴に仕掛け、入るのを待ちます。ムツかけと違い、ムツゴロウを傷付けずに捕獲できます。



カニとり

片方のハサミだけが大きいカニ、シオマネキ。生息孔に手を差し入れて取り上げたり、農具の鍬(くわ)に似た板鍬で掘って、手づかみで捕まえます。



シオマネキ



カニとりの風景(昭和45年)。
捕獲したカニを入れているガネテボ(写真の竹製のカゴ)は底が深く、カニが這い上がって逃げないようにしています。

メカジャとり

メカジャは正式にはミドリシャミセンガイと言い、数億年前からその姿が変わらないことから、生きた化石とも呼ばれます。干潟の泥の比較的浅い所に生息しているため、農具の鍬(くわ)に似た板鍬で、地上付近を掘り返し、捕獲します。



メカジャ



シャツパふみ

シャツパとはシャコのごとで、寿司ネタとしても多く使われます。干潟に浅くて長いU字型の孔を掘って生息しており、その二つの孔のいずれかを足で踏み付けると、もう一方の孔から海水と一緒に飛び出てくるので、そこを捕まえます。



シャコ



ねじ棒



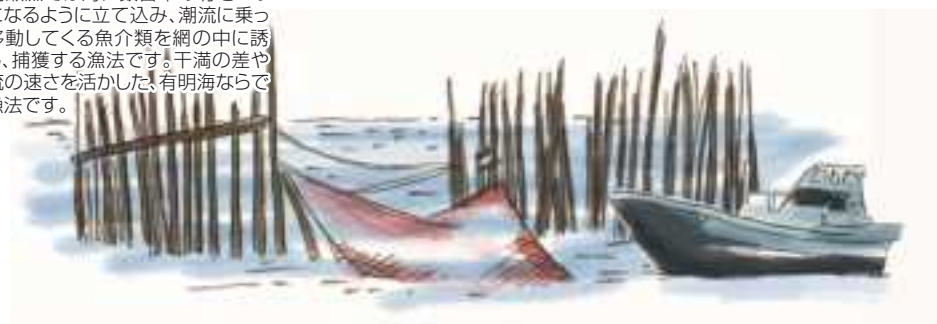
ウミタケ

ウミタケねじ

ウミタケは二枚貝で、殻を泥の中に埋め、長い水管を泥の外に出して生息しています。捕獲のためのねじ棒の先にはT型になるように鉄棒が取り付けられており、これを泥中に差込み、回して、ウミタケの水管が絡み付いた所を引き上げます。

たけはぜ 竹羽瀬漁

竹羽瀬漁では海に数百本の竹をVの字になるように立て込み、潮流に乗って移動してくる魚介類を網の中に誘導し、捕獲する漁法です。干満の差や潮流の速さを活かした、有明海ならではの漁法です。



巢孔の断面

有明海体験プログラム

有明海独特の漁を実際に体験できるプログラムが準備されています。開催時期は季節によって異なりますので、お電話などでご確認ください。



タカツバ漁

特殊な捕獲器を使って、泥中の巣にいるムツゴロウを捕まえます。



観光潮干狩り

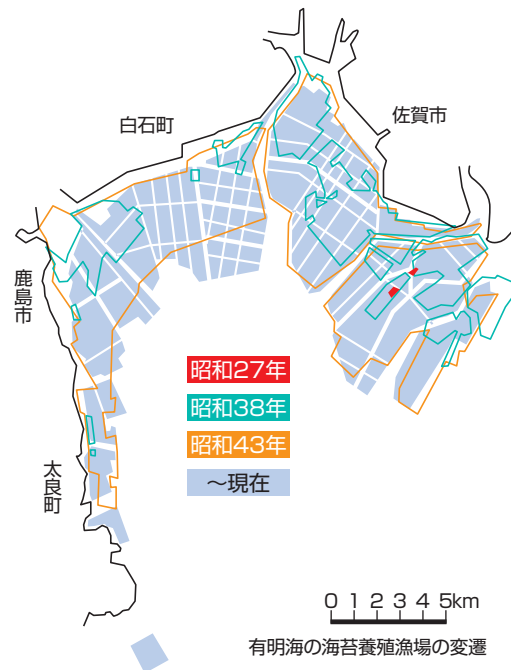
沖合いまで船で移動し、干潮を待つ潮干狩りを楽しめます。

連絡先 佐賀市観光協会
☎0952-20-2200

のり 海苔の養殖

有明海は栄養分豊富な海水と日本一の潮汐の干満差を活かし、海苔の養殖場としても活用されてきました。東よか干潟のすぐ南の沖にも海苔の漁場が広がっています。

有明海における海苔養殖は、明治の頃から試験が行われており、本格的な海苔養殖が始まったのは戦後になってからの



ことです。

昭和27年、戦後初の海苔養殖が始められた時の漁場面積はわずか11.2万㎡(東京ドーム2.5個分)でした。その後、人工採苗技術の確立、摘み取り、乾燥の機械化など、養殖技術が進み、漁場面積も大幅に拡大。現在は有明海全体で9000万㎡以上の漁場が整備され、佐賀のりは、生産量、販売高、共に日本一となっています。



昭和27年頃の海苔づくりの様子



どこまでも続く海苔ひびの風景(写真協力:佐賀県有明海漁業協同組合)

渡り鳥たちの楽園

鳥たちの三ツ星レストラン

東よか干潟はクロツラヘラサギ、ズグロカモメ、ホウロクシギなどの絶滅危惧種を含む水鳥たちの国内有数の渡りの中継地、越冬地となっています。

特にシギ・チドリ類は、日本一の飛来数を誇り、夏季にはシベリアやアラスカで繁殖し、冬季は越冬のためにオーストラリアやニュージーランドへ南下します。春・秋の渡りの季節になると、数千羽の

シギやチドリが餌をついばむ姿を見ることができます。

これだけの野鳥が東よか干潟に集まるのは、河川から豊かな栄養物質が流れ込む位置にあることで、野鳥の餌となるカニやゴカイなどの生物が豊富に生息しているためです。干潮時に広がる広大な干潟は、野鳥たちにとって、美味しい食事がいっぱい、三ツ星レストランのような場所なのです。



シギ・チドリ類の群れ 数千羽の群れが干潟の上を飛び景色はまさに絶景です。



ハマシギ
環境省レッドリスト準絶滅危惧



クロツラヘラサギ
環境省レッドリスト絶滅危惧IB類



ツクシガモ
環境省レッドリスト絶滅危惧II類



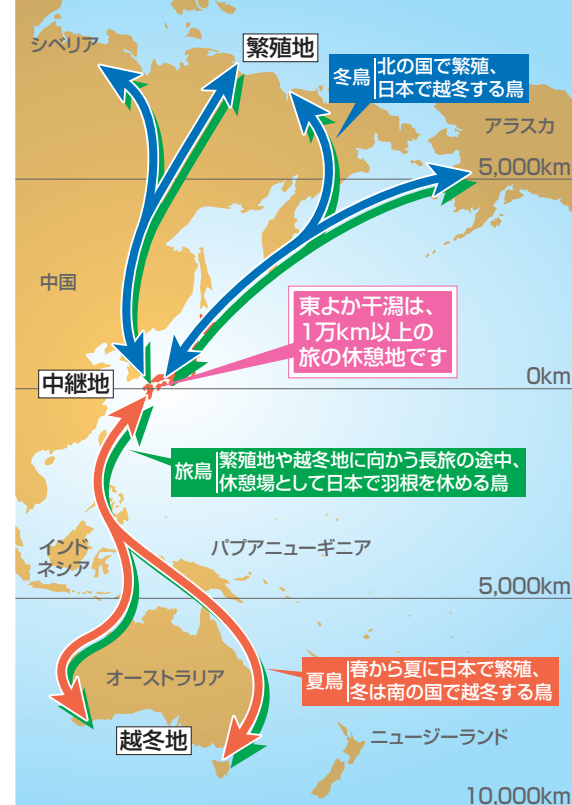
ズグロカモメ
環境省レッドリスト絶滅危惧II類



ヘラシギ
環境省レッドリスト絶滅危惧IA類



ダイシャクシギ



シギ・チドリ類の飛行ルート

干潟の保全に向けて

干潟は、1万kmを超える旅鳥たちの休息やエネルギー補給の場として重要な中継地となっています。しかし世界的に見ると、開発などにより、こうした干潟はどんどん少なくなっています。十分に休息できなければ目的地(シベリアやオーストラリア)にたどり着くことはできないのです。

そのため干潟を守るとは、野鳥たちの保護に繋がり、ひいては私たち人間も含む生物多様性の保護にも繋がります。

渡り鳥の旅には国境はありません。干潟の保全活動においても地域の枠を越え、より大きなネットワークでの活動が求められます。

行ってみよう!野鳥観察

東よか干潟は四季を通じ、約100種類もの野鳥を観ることができます。海岸には遊歩道が整備されており、お好みの場所で、バードウォッチングが楽しめます。また、堤防には望遠鏡が設置されていますので、いつでも気軽に干潟観察が楽しめます。

野鳥観察のポイント

- ◎ 特に5mを超える満潮前後1時間の時間帯が近くで野鳥を観察できます。満潮2時間くらい前に来てください。
- ◎ シギ・チドリ類の渡りのピークは春の5月初旬と、秋の9月頃です。その他、一年を通じて、様々な野鳥の姿を観察することができます。
- ◎ 満潮・干潮の時間帯はインターネットなどで公開されていますので、事前に確認をお願いします。
- ◎ 干潮の時間帯は広大な干潟を観る事ができます。
- ◎ 冬場は特に冷えますので、防寒対策をしっかりしてください。

野鳥観察のマナー

- ◎ 堤防に車を駐車しないでください。
- ◎ 堤防備え付けの望遠鏡は譲り合ってください。
- ◎ 野鳥は静かに見守りましょう。
- ◎ ごみは持ち帰りましょう。



野鳥観察の様子

東よか干潟を楽しむ

干潟よか公園

東よか干潟を望む海岸沿いには、自然と緑豊かな干潟よか公園が整備されています。堤防沿いには望遠鏡も設置され、いつでも干潟の風景や野鳥観察を楽しむことができます。また、公園内にはたくさんの遊具や水遊び場、芝生広場などが整備され、一年を通じて家族連れなどの憩いの場として人気のスポットになっています。



堤防沿いには、東よか干潟の解説板が整備され、実際に干潟を見ながら、その価値や魅力を学ぶことができます。



東よか干潟を守る人々

地元では、小中学生を中心とした「ラムサールクラブ」が活動中。干潟の生物調査や野鳥観察、他の登録湿地との交流などにより、東よか干潟の価値や魅力を学び、その素晴らしさを伝える、未来のリーダーが育っています。

またボランティアによる海岸周辺の清掃活動も行われており、干潟の保全や景観の維持につながっています。



干潟の生物調査



干潟体験



海岸のクリーンアップ作戦

東よか干潟ガイダンスルーム

干潟よか公園には、「東よか干潟ガイダンスルーム」が整備され、干潟の生物や野鳥について分かりやすく解説しています。

開館時間: 9:00～16:00

休館日: 毎週月曜日

(祝日の場合は翌日)

12/29～1/3

お問合せ: 佐賀市 環境部 環境政策課
TEL 0952-40-7202



正面の大型モニターでは、ドローンによる空撮など、東よか干潟の魅力ある映像が楽しめます。



パネルや模型、デジタルサイネージなどで、干潟の風景やそこに暮らす生き物などを紹介しています。



建物は東与賀地区に多くあった漏斗谷(じょうごだに)造りの民家を模した造りで、その特徴的な構造も見所の一つ。

周辺観光

◎世界文化遺産 三重津海軍所跡

幕末佐賀藩が外国からの脅威に備えるため、いち早く設立した洋式海軍の拠点。国内最古のドライドックも発見されています。「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとして、平成27年7月、世界文化遺産に登録されました。



◎機械遺産 筑後川昇開橋

筑後川に架かる全長約507mの筑後川昇開橋は国内唯一の昇開式可動橋。かつては旧国鉄佐賀線が走っており、列車の通過時には中央高架部分が降下していました。現在は遊歩道として整備されています。平成19年、機械遺産に認定されました。

